



男を痴漢する男たち

男に痴漢される男たち

満員電車で友人を

兄に借りたスーツを着て、髪をかき上げ、伊達眼鏡をかける。
アパートをでて徒歩一分の駅へ。

大学の友人、直人がホームにいるものを、ちらりと俺を見ても気づかず。

電車がきて乗りこんだのに、俺もつづいてぎゅうぎゅづめの人混みに。

人をかき分けて直人の背後に立つと、耳元に顔を寄せて熱い吐息。
びくりとして、漏れそうになった声を手で覆ったよう。

直人は耳がひどく弱い。

耳に息を吹きかけたら、腰を抜かしたほどだし。

さすがに今は堪えているものを、耳元で荒い呼吸をしつづけ、太ももの際どいところをなでなで。

「っ・・・！」と膝を折りそうになったのを片手で支えつつ、もう片手を滑らせて股間に。

唇がつくようでつかない距離で耳に息を吹きかけ、膨らんでいくのを指でゆっくりとなぞる。

がくがくと震えだしたのを見て、低い笑いを漏らし、先っぽを指で弾いたら「んん・・・！」とイったよう。

取っ手をつかみ、うな垂れるのに覆いかぶさるようにし、ズボンの中

に手を侵入。

尻の奥に指をねじこみ、じゅっぽじゅっぽ奥を突きながら、微妙に浮かせた舌を耳の輪郭に這わせて、水音を立てて。

「ん、ふ、くう、んふう・・・」と喘ぎが漏れだし、腰を揺らしてやまず。

「は、もお・・・！」と顔を起こし、いきうになったとき、降りる駅に到着。

指を抜いたら、慌てたように上体を起し、開いたドアの外へと跳びだしていった。
振りかえらず走っていくのを見送り、呆けていたら、スマホにメッセージ。

「助けてくれ。今、トイレの個室にいる」

次の駅で降りて駆けつけたら「これ、これちよおだい！」と股間にすがりついてきたに、手を引いて近くのホテルへ。

急かされるまま、痙攣する息子を食わせてやれば、あんあん腰を跳ねつつ「ね、ねえ、耳、舐めてえ！」とおねだり。

耳をしゃぶりまくって腰を強打すれば、狂喜してあられもなく乱れて。

「ああ、もっとお！痴漢、にい、焦らされてえ、もお、俺、我慢、できなああ！」

どれだけ注いで潮を吹かせたやら。

事後に二人してぐったりしつつ、あらためて俺が告白し交際すること

に。

OKをもらえたとはいえ「裏切ったら許さないからな」と睨まれ、内心ひやりとしたのはいうまでもない。

満員電車でサラリーマンたちに

登校は通勤ラッシュと重なって電車は満員。

おかげで痴漢が横行しているらしく、高校では注意を。

まあ、男でラグビー部の俺には関係ないし、もしやられたとしても返り討ちにする自信が。

どうやって痴漢を懲らしめようかと考えていたら、尻を撫でられた。

がっしりとつかんで揉み揉み。

「いい度胸だ！」と不埒なその手をつかもうとしたが、まわりのサラリーマンが圧迫をしてきて身動きがとれず。

もがいているうちに両手で尻を揉まれるし、複数の手に全身をまさぐられるし、とくに股間には集中的に。

さすがに息子を多くの大人たちにいたずらされては、たまらず。

「はあう、んん、だ、だめえ・・・！そんな、いっぱいあ、でえ、ちんこ、触んなああ！ひいああ！や、やあ、いったのにい、触っちゃ、やだああ！」

精液で濡れたズボンをいたずらされつづけ、ズボンに侵入した無数の指に尻の奥をかき乱されぐちよぐちよに。

イっきばなしで限界を超えて「やらあ、いっぱい、指い、そ、そこ、やらああ！」とメスイキまで。

息づかいの荒いサラリーマン軍団はまだまだやる気満々のようだが、一旦、離れて。

倒れそうになった俺を、背中が水平になるよう支えたら、目のまえにぴくぴくする蒸した一物を。

顔を背けるも、多数の手で飲まされて、ほぼ同時にうしろでも啞えさせられ、畳みかけられる腰の強打。

前後だけでなく、四方からサラリーマンたちの息子を突きつけられ、頬になつりつけられ、乳首に押しつけられ、俺の息子に意地悪されて。

「んんん、くう、ううん、ぷはあ！ああう、らめえ、ださない、でええ！」

懇願するもむなしく、顔射されて中だしされて体中に精液を噴きかけ

られる。

濃い匂いに目をくらませる間もなく、抱きあげられ「俺たち全員と愛しあおうよ」と囁かれたなら、順番にサラリーマンたちが息子で貫いて・・・。

なんて妄想をするのは、現実には空いている電車。座席は埋まっているが、痴漢されるほど混んではない。

「まあ、田舎だし、痴漢されたくて上京するっていうのもなあ」とため息を吐いたら、ねっとり尻を撫で上げられて。びくりとして振りかえれば、幼なじみがにんまり。

「欲求不満そうな顔しちゃってえ」

否定はできなかったものを、思いっきり肘鉄を食らわしてやった。